

# 上野殿御返事

文永一一年一月一日 五三歳

すみざげふたつ ころじ こ こんやく やまのいも こ ごぼう  
聖人二管・柑子一籠・菰若十枚・薯蕷一籠・牛房十束、種々の物送り給ひ候。  
とくしょう むしょう すな もちい えんぶだい  
得勝・無勝の二童子は仏に沙の餅を供養したてまつりて閻浮提三分が一の主とな  
いわゆる じゅうどう ぼさつ じょうこうぶつ ごきょう  
る。所謂阿育大王これなり。儒童菩薩は錠光仏に五茎の蓮華を供養したてまつりて仏  
となる。今の教主釈尊これなり。法華經の第四に云はく「人有って仏道を求めて一劫の  
中に於て合掌して我が前に在って無数の偈を以て讃めん。是の讃仏に由るが故に無量の  
功德を得ん。持經者を歎美せんは其の福復彼に過ぎん」等云云。文の心は、仏を一劫が  
間供養したてまつるより、末代悪世の中に人のあながちに<sup>強</sup>にくむ法華經の行者を供養す  
る功德はすぐれたりとかせ給ふ。たれの人のかゝるひが事をばおほせらるゝぞと疑ひ  
おもひ候へば、教主釈尊の我とおほせられて候なり。疑はんとも信ぜんとも御心にまか  
せまいらす。仏の御舌は或は<sup>おもて</sup>面に覆ひ、或は三千大千世界に覆ひ、或は<sup>しき</sup>色究竟天ま  
でも付け給ふ。過去遠々劫よりこのかた一言も妄語のましまさゞるゆへなり。されば或  
る經に云はく「須弥山はくづるとも大地をばうちかへすとも仏には妄語なし」ととかれ  
たり。日は西よりいづとも大海の潮はみちひずとも仏の御言はあやまりなしとかや。  
其の上此の法華經は他經にもすぐれさせ給へば、多宝仏も証明し、諸仏も舌を梵天につ  
け給ふ。一字一点も妄語は候まじきにや。

其の上殿はを<sup>幼</sup>さなくをはしき。故親父は武士なりしかどもあながちに法華經を尊み給  
ひしかば、臨終正念なりけるよしうけ給はりき。其の親の跡をつがせ給ひて又此の經を  
御信用あれば、故聖靈いかに草のかげにても喜びおぼすらん。あはれ<sup>生</sup>いきてをはせばい  
かにうれし<sup>嬉</sup>かるべき。此の經を持つ人々は他人なれども同じ<sup>りょうぜん</sup>靈山へまいりあはせ給ふ  
なり。いかにいはんや故聖靈も殿も同じく法華經を信ぜさせ給へば、同じところに生ま  
れさせ給ふべし。いかなれば、他人は五六十までも親と同じしら<sup>白</sup>なる人もあり、我が  
わか<sup>若</sup>き身に、親には<sup>早</sup>やくをくれて教訓をもうけ給はらざるらんと、御心のうちを<sup>推</sup>しはか  
るこそな<sup>涙</sup>みだもとまり候はね。

抑<sup>そもそも</sup>日蓮は日本国をたすけん<sup>そ</sup>とふかくおもへども、日本国の上下万人一同に、国のほ  
ろぶべきゆへにや用ひられざる上、度々<sup>怨</sup>あだをなさるれば力をよばず山林にまじはり候  
ひぬ。大蒙古国よりよせて候と申せば、申せし事を御用ひあらばいかに<sup>寄</sup>なんどあはれな  
り。皆人の当時の<sup>寄</sup>ゆきつしまのやうにならせ給はん事、おもひやり候へばなみだもとま  
らず。

念仏宗と申すは亡国の悪法なり。このいくさには大<sup>軍</sup>体人々の自害をし候はんずるなり。  
善導と申す愚癡の法師がひろめはじめて自害をして候ゆへに、念仏をよくよく申せば自  
害の心出来し候ぞ。禅宗と申し当時の持齋法師等は天魔の<sup>しよい</sup>所為なり、教外別伝と申して、  
神も仏もなし<sup>狂</sup>なんど申すものくるはしき悪法なり。真言宗と申す宗は本は下劣の經にて

候ひしを、誑惑おうわくして法華經にも勝るなど申して、多くの人々大師・僧正などになりて、日本国に大体充満して上一人より頭こうべをかたぶけたり。これが第一の邪事ひがごとに候を、昔より今にいたるまで知る人なし。但伝教大師と申せし人こそしりて候ひしかども、くはしくもおほせられず。さては日蓮ほゞこの事をしれり。後白河の法皇の太政の入道にせめられ給ひし、隱岐法王おきの鎌倉のかまくらにまけさせ給ひし事、みな真言悪法のゆへなり。漢土にこの法わたりて玄宗皇帝ほろびさせ給ふ。この悪法かまくらに下って、当時かまくらにはやる僧正・法印等は是なり。これらの人々このいくさを調伏せば、百日たゞかふべきは十日につゞまり、十日のいくさは一日にせめらるべし。

今始めて申すにあらず、二十余年が間音こえもをしましよばはり候ひぬるなり。あなかしこ、あなかしこ。この御文は大事の事どもかきて候。よくよく人によませてきこしめせ。人もそしり候へ、ものともおもはぬ法師等なり。恐々謹言。

文永十一年太歲甲戌十一月十一日

日 蓮 花 押

南条七郎次郎殿御返事